



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『夜の寝覚』論：反〈ゆかり〉・反〈形代〉の物語
Author(s)	宮下, 雅恵
Citation	国語国文研究, 111, 16-28
Issue Date	1999-03-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94698
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_111_16-28.pdf



『夜の寢覚』論

——反〈ゆかり〉・反〈形代〉の物語

宮 下 雅 恵

一 督の君

『夜の寢覚』には、『草のゆかり』と称される人物がただ一人存在する。それは「内侍の督の君」、すなわち寢覚の上の亡き夫・老閼白の遺児である。

・「…大臣〔「老閼白」亡くなりて、今だに、さるかたにつけて、浅くもてなさじ』と思ひ寄り、『内侍督に』と心ざししに、『アナタハ』あながちにかけ離れ、人〔「督の君」に譲りのがれたまひにしを、いみじう恨めしとは思ひながら、草のゆかりことよせて、『おのづから、思ふ心の片端をも聞こえ知らする風の紛れもやある』と、似げなからぬことに思ひなして…」

(巻三・二七八～二七九頁)
(注¹)

・「草のゆかりなつかしくも思ひよそへらるるうちに、いとらうたき気色したる人なめるを、『なほ、この人しばし言ひとどめて、

如く悔しき胸の隙をだにあげよ』と語らはせたまはむ」と、おぼしめして、内侍の督の君の御方にぞ、「上らせたまへ」と、御消息ありける。

(三・三〇九)

前者はかの〈帝闖入〉事件の際に帝が寢覚の上に対して語った言葉、後者は事件後のある一夜における帝の心内語の一部である。ここで「内侍の督の君」を寢覚の上の「草のゆかり」として規定する認識主体は寢覚の帝であるということを、まず確認しておきたい。

改作本によれば寢覚の上が老閼白（当時左大将）の妻とさせられた時すでに彼には三人もの娘がいたのだから、この「草のゆかり」という規定は血縁を有することを要請してはいない。そればかりか、彼女が寢覚の上との容姿などの類似性を指摘されることはただの一度もない。周知の通り『源氏物語』では、「草のゆかり」という語は「紫のゆかり」と共に藤壺と紫の上の血縁を示す意に限って用いられており、また彼女たちは光源氏の視線によって容貌の類似を確認されていたわけだが、その〈ゆかり〉の方法は物語の進行に従って次

第に相対化されていったのであった。^(注2)となれば、血縁も容貌の類似もない継娘を「草のゆかり」として規定する「寢覚」は、へゆかりの方法をほとんど原型を留めないまでに相対化してしまっている、と一応はいえそうだが、問題は「寢覚」におけるその相対化のあり方なのである。彼女を「草のゆかり」として認識する主体はあの帝しかないのだ。帝によつてのみ「草のゆかり」として規定される督の君——彼女が敢えて「草のゆかり」と呼ばれる物語的意味は一体何なのか。

督の君をめぐる疑問はこれだけにとどまらない。「夜の寢覚」第三部は彼女の入内準備の様子から始まっているが、〈帝闖入〉事件を引き起こす遠因、すなわち寢覚の上が宮中にとどまることになった理由がまさに彼女の入内にあつたという事実を考えれば、これは決して無視できない事柄であるはずだ。従来彼女の入内については、故関白家女主人としての寢覚の上の卓越した手腕を描き出すことに奉仕する記事としてのみ言及されていたに過ぎないのだが、視点を變えて物語展開上での必然性から考え直すなら、彼女は帝に入内を望まれていた寢覚の上に代わり故関白の遺志に応えるべく入内したのだから、当然帝寵を受け故関白家に、ひいては寢覚の上に栄華をもたらすことが期待される存在であつたのはいうまでもない。実際それは巻五に至つて彼女が次期春宮候補たる男子を生むことで達せられてゐるのだ。

だが「物語展開上での必然」とはいうものの、改めて物語叙述をたどつてみれば、そこへ至るまでの過程は決して容易ではなかつた。そもそも中宮を初めあまたの女御たちがひしめき、かの寢覚の上の

父でさえ娘たちの入内を諦めたほどの後宮で、父を亡くした娘が特に帝寵を得るなどというのは考え難いことであつたはずである。そして現に入内当初から早くもその道のりの険しさは明記されてゐた。督の君に対して「いとさしもおぼしめさざりつれど」(三・二四一)とある通り多大な期待など抱いてはいなかつた帝は、なるほど第一日目に「飽くまであてに、なまめかしく、らうたげなるけはひ、手当たりなれば……こよなく近まさりして、あはれにおぼしめしなられ」(三・二四一)、四夜続けて召したというものの、次の夜は中宮を召し、さらに次の夜帝は式部卿宮の御方を思う。そして帝は「いで、あはれ、故大臣おはせましかば……他人まぜざらましを。いと心やすしや」(三・二四六)と、督の君の父が既に亡いことに安堵させてゐる。「まづめでたきにても、いつとなく、やすげなのわざや」(三・二四七)——督の君の行く末を案じる寢覚の上の思いに状況は集約されていよう。入内当初の内侍督の存在は、中宮はもちろんのこと他の女御方に対しても全く脅威ではあり得ず、帝にとつて督の君は所詮「にくからずおぼしめさるる」「めづらしき人」以上のものではなかつた、ということだ。

ところが督の君が春宮の母となるなどということは到底考えられないような入内当初のこのような状況を、そして「めづらしき人にくからずおぼしめさるるにつけても」「宮の御心につゆばかりも違ひきこえさせじ」とのみおぼしめ(三・二四四)していた帝自身の思いさえも裏切つて、督の君は懷妊するのである。

①「いかで位を疾う去りて、すこし軽らかなるほどになりて、いみじき大臣のもてなし限りなしといふとも、いま一度の逢瀬を、

いかでかならず」と、おぼし急ぐ御心深く、冷泉院を急ぎ造らせたまひつつ、皇子のおはしまさぬ嘆きをせさせたまふ。中宮をはじめてまつり、御方々、いかでと御心を尽くしおぼしめすに、十月ばかりより、内侍の督の君ただならぬ気色になやましようおぼいたるを：（中略）：正月十日に、四月と奏してまかてたまふに、宮と申せど、「あな思ひのほか」と、御心動かぬやうもなきに、まいて異御方々胸ふたがりて、「こはいかなることぞ」とおぼされ、世人も、「思ひかけざりつることかな」と言ひあさみたるさま、ことわりなり。

（五・五一四～五一七）

寢覚の上との逢瀬を夢見て讓位を考えるものの、次の春宮候補がないことを嘆く帝。何とかして御子をと願う御方々。このような状況の中、新参の督の君が懷妊してしまう。これは女御や世間の驚愕はもちろんのこと、帝の胸中を知る中宮といえども動揺せずにはいられたかつたほどの意外な出来事として語られているのである。物語展開上の必然というにはかなり強引ともいえる督の君の懷妊。一体何がこれを可能にしたのか、これがもう一つの疑問である。

督の君をめぐるこれらの疑問を解くためには、もう一人の相対化された「ゆかり」である真砂君を登場させねばならない。何しろ督の君が懷妊した頃、数多の女たちを帝の寢所から遠ざけていたのは他ならぬこの少年であるからだ。

二 真砂君

②そのころ、内に女宮三所、男、春宮よりほかの儲けの君おはしませず。帝も、あいなくかき絶え、「つれなきをしも」と言ふやうに、恋しさも妬さも、月日に添へて忍びがたくのみおぼしきさるるままに、まさき君を夜昼御前も去らず召しまとはしつ、女御たちの御宿直の数、この君にみな押されたまひにたれど、様異のことにて、恨み申させたまふべきかたなきに、「なほ慰まぬ」といふやうに、ことわりなくのみおぼしめさるれば：

（五・五一四～五一七）

督の君の懷妊が判明する場面①の直前に語られているこの引用②では、真砂君に対する帝の「寵愛」ぶりは凄まじいものがある。ここには、帝が寢覚の上恋しさを紛らわせるために彼女の実子真砂君を「召しまとはし」ていた様子が語られている。「女御たちの御宿直の数、この君にみな押され」てしまう程なのに帝の心は「なほ慰まぬ」という執着ぶり。そしてこの「寵愛」の中心となるもう一か所の舞台は、

③まさき君の、いとよく通へる様体、けはひのうつくしさを、おぼしめしよそへさせたまふかたにても、中宮の御方にては、さすが、さはいへど、おぼすままにこの君「真砂君」をもえ近く語らはせたまはず、あなづらはしく心やすき督の君の御方にては、ありよくて、母君まかでたまひにし後は、片時も出ださせたまはず、召しまとはして、我が御方にては人目もありな

るべき時時は、ただこの御方にて御覧じよそへさせたまふに：

(四・三六六～三六七)

とあるようにまさしく「督の君の御方」なのである。督の君の懷妊とこの事実とが深く関わっていることは言を俟たないであろう。

ではこのような真砂君「寵愛」はいつから始まったのか。

④上には、あさましう、思ひ知る一行の返り事だになくてやみにしより、「かばかりの心にては、さりととも頼みをかけ、後の逢瀬をこがましかりけりかし」と、いみじう悔しう、妬うおぼしめされて、内侍督に、「見馴るるほどはなけれど、父大臣などもなく心細かなめる御有様を、人よりも心苦しうなむ、思ひとどめらるる。そこ「督ノ君」にも、増す方なくのみおぼさむなむ、うれしかるべきを、かの人「寢覺ノ上」、昔より思ふ心深かりしかど、口惜しくてなむ、やみにし。「まかでなむ」とのみなむあめるを、なほしばし慕ひとどめて、忍びやかに思ふこと言ひ聞かすばかり、おぼしめぐらせ」など、つゆまどろまず、語らひ明かされたまひける。

御迎へに、まさこ君の参りたるけはひを聞きつけさせたまひて、「おやすけても、いざ疾きかな。うつくしきものなりかし」と仰せられて、まだ夜深く、見捨てて下りたまひぬる慰めに、「まさこはこちや」と夜の御殿に召し入れたり。いつも、かくのみけ近くならはさせたまひたれば、いとよく馴れきこえさせたるを、「ねぶたからむ。ここに寝たれよ」とて、装束など引き解かせたまひて、御衣をうち覆はせたまひて、近うかき寄せさせたまひたるに、我が身にしめたる母君の移り香、紛るべうもあ

らず、さにとほひたる、なつかしきまきりて、単衣の隔てだになくて臥させたまひたるに、かたち、身なり、つぶつぶと丸に、うつくしうて、髪の手あたりなど、いとつややかに、あてに、なつかしく、なよやかなるけはひ、手あたり、心のなしにや、いみじと消え入りし有様のふと思ひわたさるるに、いみじううたうならせたまひて、「今宵、母のもとにこそ寝たりけれな」と問はせたまへば、うちうなづきたり。「うらやましかりけることかな」とて、「内の大臣よりも、我を思へよ」など語らはせたまふに、をりをり申し出でたる御答へなど、いはけなからず。

「かかる女のあらまし」かば、すこし心は慰みもしなまし」とまで、あはれにおぼされて、今ぞすこし大殿籠り入りたる。君も寝入りて、ことと明うなりにければ、おどろきて、うちとけたるを、かたはらいたげにて、すべりまかり出づるを、「さはれ、幼きほどは、ただ我にも見えよ」とて、かき撫でつつ御覧すれば、髪ざし、髪のかかり、頭つきなど、火影のただそれとおぼゆるに、限りなく御覧ぜられつる。顔はただ内の大臣に違ふところなからむめり。けはひ、様体こそ母君に通ひけれ」と御覧じて、承香殿の女三の宮を限りなく思ひきこえさせたまふを、「かばかりおはしまさずかし」と、めざましきまでうちまもらせたまふ。

(四・三三三～三三六)

かの〈闖入〉事件の後もお、帝は督の君を利用して何とかもう一度寢覺の上と会う機会を持つていた。そんなある夜、督の君を迎えに來た真砂君が彼女と入れ替わりに帝と同衾する(A)。これはいつものことなのだという但し書きがある(B)とはいえ、「単

衣の隔てだになくて臥させたまひたる」(C)というくだりには何か異常なものを嗅ぎ取りたくなる。男色、あるいはホモ・セクシュアルといった言葉も脳裏をよぎるが、永井和子氏も述べていたようにこれはいわゆる男色行為ではなく、あくまで代償行為なのだ。また鈴木一雄氏は引用場面について次のように述べている。

帝はまさき君に、寢覚の上の感触を重ねている。あの時は「単衣の関」があつたが。…寢覚の上そつくりの女がもしあつたら。帝は、まさき君から、更に寢覚の上「ゆかり」の女性まで切望する。この帝の思いには、藤壺思慕の余り、若紫を見いだした光源氏のことが踏まえられているのであろう。…帝は、寢覚の上「ゆかり」のまさき君と親しくすることで、女君その人との親しさを実感したのである。

(小学館日本古典文学全集三四九頁頭注)

鈴木氏はここでの帝の思いを光源氏のそれと重ね合わせているが、真砂君はあくまで「少年」であつて、「少女」ではない。従つてここに「紫のゆかり」の物語までも重ね合わせる事ができないことは至極当たり前のように思えるが、帝が寢覚の上によそえるものとしての真砂君を再認識するまでの経過を改めて詳しくたどり直してみると、事は案外複雑なのである。

まず第一に、帝は真砂君に寢覚の上の何を投影して「よそへ」といるというのか。それは先の引用③に明らかなのだが、寢覚の上に「いとよく通へる様体、けはひ」であつて、容貌ではないのだ。そして引用③に時間上先行する④においてはまず、「顔はただ内の大臣に違ふところなからむめり」(F)、すなわち真砂君の顔が内大臣と瓜二つだと帝に認識されている点に注目しよう。〈闖入〉事件以前の帝

が真砂君をどのように見ていたかを具体的に知る手だてはない(ここでもまた中間欠巻部の壁に突き当たってしまうのだ)が、彼が寢覚の上の子であるという事実そのものは、帝はよくよく意識していたに違いあるまい。少なくとも帝は以前から、老閑白と寢覚の上の子でありながら内大臣によく似ている子として真砂君を(他の多くの登場人物と同じく)注視していたに相違なく、その意識がこの部分に表現されているのであろう。要するに真砂君の顔は寢覚の上に似てはいないということなのである。

にも関わらず、そのすぐ後で帝が「けはひ、様体こそ母君に通ひけれ」という深い感慨を抱いているのを見逃してはならない。「母君の移り香」が帝の心に「なつかしさ」を喚起する。そして帝は、真砂君の体つき、髪の手あたりを繰り返し繰り返し確かめる。〈闖入〉によつて寢覚の上の感触の記憶を得た帝が、顔かたちを見ていただけでは分からなかつた真砂君と母との「けはひ、様体」の類似を発見したことによつて、彼の顔が寢覚の上に似ておらず内大臣に似ているという事実は、今や帝にとっては意識する必要のないものとして捨象されてしまったのだ。現にこの後、物語では帝の目から真砂君と内大臣との容貌の類似が指摘されることはない。

第二に、帝が「よそへ」る積極性の度合いはどうか。帝と真砂君が「単衣の隔てだになく」(C)共寝した時、帝は真砂君をかき撫でつつ「心のなしにや、いみじと消え入りし有様のふと思ひわたさるるに」(D)と、寢覚の上を思っていた。この時点では真砂君を通して寢覚の上の姿が「ふと」思い出されたとあり、しかも「心のなしにや」とあるように、寢覚の上を思い出したのは「強いてそう思っ

て見るからであらうか」という断りつきなのであって、その原因を積極的に真砂君自身の性質に求めてはいないのだ。しかしその「心のなし」の結果、真砂君に寢覚の上の面影が重ね合わせられ、帝は真砂君を「いみじうらうたう」思うようになったという。

またこの後帝が眠りに落ち、目覚めて再び真砂君を「かき撫で」た時(F)、真砂君が寢覚の上に酷似しているということが帝に改めて確認されていることにも注意したい。帝が眠りに落ちる前には、「心のなしにや」という、帝の心の側の条件付けによって真砂君と寢覚の上との類似が発見されていたのに対し、目覚めた後には「火影のただそれとおぼゆる」(E)と、ほぼ完全に同一のものとして看做されているのである。「ほぼ」というのは、前に述べたように「顔はただ内の大臣に違ふところなからむめり」という留保つきであるからだが、そのことは「けはひ、様体」が「母君に通」うという事実によつてもはや意識する必要のないものとして捨象されていたことは既に確認した通りである。こうして「心のなし」という条件付けを離れた帝の目は、「限りなく御覧ぜられつる」「めざましきまでうちまもらせたまふ」と、真砂君に釘付けになつていったのだと、この場面の終わりでは語られている。

以上の二点から分かることは、物語は真砂君を初めから寢覚の上によそえる対象として語り始めているわけではないという事実である。真砂君は寢覚の上とは容貌が似ていないにもかかわらず、初めは「心のなしにや……ふと思ひわたさるる」、そして場面の終わりでは「ただそれと思ゆる」というように、寢覚の上によそえるべきものとして次第に認識されていったのだ。ここに至るまでの物語叙述は決

して一足飛びではなく、段階を踏み周到に積み重ねられたものなのである。

この場面から始発している、相対化された「ゆかり」の物語が漸く見えてくる。男の側の「心のなし」によつて眼前の対象と恋しい女とのずれが不問に付され、やがては同一のものとして認識されるに至る物語。しかもそれによつて恋しい女本人への思いが完全に慰むことはないのだ。これはまさしく、「源氏物語」宇治十帖に見られる薫の認識形式そのものではあるまいか。この点でも寢覚の帝は薫の造型を引き継いでいるといえるが、本稿では認識される側の真砂君の問題に絞りたい。

ここで一つの仮定を試みよう。もし、寢覚の上の血を引く少年真砂君が少年ではなく、少女であつたなら——それならば帝の真砂君「寵愛」はまさに光源氏が少女若紫を見出したあの物語の様相を帯びてくる。そしてその背後に「ゆかり」の物語を見ることはたやすいはずなのだ。「ゆかり」の資質を備えた「形代」、それが真砂君なのである。

しかし、真砂君をめぐる物語の論理は「ゆかり」としても、また「形代」としても規定しきれない。そもそも帝の真砂君「寵愛」は、彼が成長し元服する前の「少年」であるからこそ可能になっている。彼の肉体が成長し「けはひ、様体」が寢覚の上からかけ離れてしまつたら、そして元服により社会の秩序内に据えられてしまつたら、もはや帝が彼と「共寝」することはありえない。いやそもそも帝自身、「かかる女のあらまし」かば、すこし心はなぐさみもしなまし」(E)と心中でつぶやいてさえいるのではないか。「かかる」という語が直接

指示しているのは真砂君であることを考えると、真砂君が寢覚の上の「ゆかり」として「よそへ」、愛すべき者としての資質を備えていることは間違いない。だが現実にはそのような女はいない。以前は「かたちはこれこそ」と思っていた式部卿の宮の女御すら、いざ見てみると「火影には、すべてなぞらへに言ひ寄るべきにあらず」と御覧じくらべ（四・三六四）、涙を流す帝なのだ。もはや帝は普通の女では決して満たされない。そして寢覚の上に「よそへ」得る唯一の存在真砂君も、女ではない。従つて帝の心は決して慰まない。あるのはただ、やがてやつて来る真砂君との決別の時も知らず、女君への渴望を満たそうとして彼女の息子にのめりこむ帝の無惨な欲望だけである。

真砂君が女性であれば、このような反実仮想を帝が抱くことはなかったはずだ。真砂君は本来「ゆかり」たるべき存在でありながら、女ではないというただその一点によつて「形代」にスライドされる。そして「形代」の物語の終焉はやがてくる彼の成長によつてもたらされるであろうことまでもが見通されているのである。「少年」真砂君とは、「ゆかり」の資質を備えた期限付きの「形代」——敢えていうならば「形代」ならざる「形代」なのである。

三 相互補完

前節では真砂君もまた相対化された「ゆかり」／「形代」であると述べた。繰り返すが、真砂君は初めから寢覚の上の身代わりとして登場したのではない。そもそも引用④の始発では、真砂君は「草の

ゆかり」督の君の身代わりのように帝と同食したのだった。寢覚の上に逢ふこと叶わずせめてもの「草のゆかり」を求めた帝の許に、督の君と真砂君が続けざまにやつて来る。そしてこの場面ではいつの間にか、「草のゆかり」の役割が督の君から「少年」真砂君へとシフトしているのである。引用④のうち、次の二箇所をもう一度見てみよう。

・「帝ハ督ノ君ニ」つゆまどろまず、語らひ明かさせたまひける。（四・三二四）

・「かかる女のあらましかば、すこし心は慰みもしなまし」とまで、あはれにおぼされて、今ぞすこし大殿籠り入りたる。（四・三二五）

「今ぞ」の語が示しているように、これらの表現は明らかに対応関係にある。帝は、この場面の初めでは督の君と「つゆまどろまず、語らひ明か」していたのだった。ところが、「督ノ君ガ」下りたまひぬる慰めに「夜の御殿に召し入れ」たはずの真砂君によつて、「すこし大殿籠り入りたる」状況に至っている。これは、真砂君をかき撫でつつ話をしているうちに帝の心が落ち着きを取り戻したのであり、「すこし」ではあるが帝の心が休まる隙ができたのだということを示すものに他ならない。つまり真砂君は帝にとって単に督の君が「下りたまひぬる慰め」としてだけではなく、督の君によつて慰むことのなかつた帝の心を督の君に代わつて慰める役割を担う存在であったということなのだ。この意味で、真砂君は督の君の役割を補完する存在なのだといえよう。この場面の始発の裏では、そのような物語が動き始めていたのである。

では督の君はやはり「ゆかり」の物語を全く担うことのない、ただ「ゆかり」の物語を喚起するためだけに配された仕掛けに過ぎないのか。相対化された「ゆかり」の物語の本体は真砂君一人なのだろうか。答えは否である。真砂君の存在は督の君を得て初めて完全なものとなるのであり、またそのように存在させられているからだ。以下では、督の君自身の持つ物語的意味を追ってゆくことになる。

⑤「寢覚ノ上ガ居ルノハ」「そのあたり」とばかりに心をかけて、屋なども「帝ハ督ノ君ノ所へ」おはします。内侍督のおぼえのいみじきにとりなして、世には、愛でののしり、御方々には、いとやすからず、うれはしきことに、おのおの心を乱りけり。中宮ばかりぞ、「けにくからず、らうたげに思しめいたれど、御気色、いと三千人をきはむるほどにはあらざるを。：昔よりおぼしめてしことの、目に近うてさぶらふに、御心の乱るるにこそあべかめれ。さて、督の殿がちにおはしますなめり。夜の宿直は、人にすぐると見えぬものを」と、心得たまひて、をかし、とおぼしめしけり。

(三・二六一—二六三)

これは督の君入内後、「闖入」以前のものである。ここでは督の君の価値は寢覚の上に会うための口実となる点にあるのだということが示されているが、このことは本稿初めに引用した「闖入」場面での帝の「草のゆかりことよせて」という言葉によって裏付けられよう。さてその「闖入」事件の後、帝が真砂君を「寵愛」していた問題の夜④、そもそも何故当の督の君が帝に召されていたのか。その事情を語る場面において再び督の君は帝によって「草のゆかり」と規定されていたのだ。既出箇所ではあるが、少し前から再度引用

する。

⑥中宮は、明日よりかたき御物忌にて、上らせたまはず。承香殿は里に出でたまひにしかば、左の大殿の女御、宣耀殿ときこゆるぞ、さぶらひたまへど、「草のゆかりなつかしくも思ひよそへらるるうちに、いとうたき気色したる人なめるを、^①「なほ、この人しばし言ひとどめて、妬く悔しき胸の陳をだにあげよ」と語らはせたまはむ」と、おぼしめして、内侍の督の君の御方にぞ、「上らせたまへ」と、御消息ありける。(三・三〇九)

問題の夜督の君が帝に召されるまでのいきさつが引用⑥では極めて念入りに語られているが、その経緯と共に、ここでは帝にとっての重要度からみた女たちの序列の変化が実に鮮やかに語り出されているのである。督の君は入内直後の不安定な位置づけとは明らかに異なり、少なくともこの時点では宣耀殿の女御よりも重要度が高い存在と看做されている。宣耀殿の女御は現存本ではこの部分で初登場した人物であることを思い合わせると、まるで、督の君よりも重要度が低い女御をわざわざ設定したようにも見えるところではある。それはさておき、寢覚の上に近づくための手段としての督の君の価値に変わりはないが、この場面では容貌の類似も血縁もないはずの彼女が寢覚の上に「なつかしくも思ひよそへらるる」「草のゆかり」であるときれ（傍線イ）、のみならず督の君自身の資質にまで言及されている（傍線ロ）。これらの現象の意味するところは決して小さくはない。以下に引く、帝が真砂君を「寵愛」していた場面以後の状況説明（引用③と重複する）はそれを裏付けけるものであろう。

⑦上も、人がらのいとあてに若くらうたげなるも、にくからず、

めづらしき御思ひも浅きにはあらぬ御心に、しめたる釣舟のた
よりとさへ、心をとどめさせたまひて、忍びの御文の、中に籠
めさせたまふとても、つねに渡らせたまひなどして、まさき君
の、いとよく通へる様体、けはひのうつくしさを、おぼしめし
よそへさせたまふかたにても、中宮の御方にては、さすが、さ
はいへど、おぼすままだにこの君「真砂君」をもえ近く語ら
せたまはず、あなづらはしく心やすき督の君の御方にては、あ
りよくて、母君まかでたまひにし後は、片時も出ださせたま
ず召しまとはして、我が御方にては人目もありなるべき時々
は、ただこの御方にて御覧じよそへさせたまふに、承香殿の御
方の女三の宮をうつくしう思ひきこえさせたまふにも、いたう
劣らず、らうたきものに、この御方にては御覧じ馴れなどする
ほど、督の君の御おぼえを、「なほ、すぐれたり」と、人も思ひ
言ひ、御方々も、いかでかは心やすく。(四・三六六―三七七)

⑤・⑦どちらの場面においても帝が登花殿がちであることに対する
世の人々の反応が語られているが、世の人々や女御方の考えに反し
て、督の君自身が帝に愛されているために帝がそこに居るわけでは
ないのだということが繰り返し強調されている。この点だけならば
⑤と⑦の状況はさほど変化していないように見える。

だが⑤から⑦へ、すなわち〈闖入〉事件前から真砂君「寵愛」場
面(④)の後にかけて、帝が登花殿へ行く動機は少しずつ周到にず
らされつつ重ねられているのだ。その帝の動機とは、寢覚の上の「草
のゆかり」(傍線イ)、督の君自身への思い(同ロ)、真砂君「寵愛」
(同ハ)の三つである。(ロ)については、既に見た通り以前にも「あ

くまであてになまめかしくうたげなるけはひ、手当たり」を「あ
はれにおぼしめしなれ」たと語られていたとはいえ、⑤の段階で
は重視されていない。帝が寢覚の上の身代わりとして督の君の入内
を認めたのは彼女が「草のゆかり」であるが故だったのであり、そ
の内実は「釣舟のたより」であった。つまり⑤では(イ)の要素が
(ロ)よりもはるかに重かったことになる。しかし〈闖入〉後の場面
⑥ではその「草のゆかり」という規定が、帝に宣耀殿の女御よりも
督の君の方を召したいという動機付けを与えていた。さらに⑦では
よりいっそう状況が変化し、まず(ロ)が語られた後で「釣舟のた
よりとさへ」として(イ)が添加されており、帝にとっての両者の
意味合いの重さが逆転しているのである。

これらの叙述はつまり、後宮における督の君の位置が他の女御方
に比して決して軽くはないものとなりつつあるということを意味し
ており、ひいては帝にとって督の君自身の持つ魅力そのものの重要
性が急浮上し、彼女が単なる寢覚の上に近づくための手段にとどま
らず、彼女自身に価値を見出させる存在となりつつあることを意味
している。果たして彼女は帝の子を儲けることになる——ここに
至って本来〈形代〉でしかなかったはずの彼女はついに〈ゆかり〉
の物語をその背後に引き寄せているのである。寢覚の上の身代わり
として入内した彼女は〈形代〉性を担うとはいえ実際には寢覚の上
と血縁関係になく寢覚の上に似てもないが、しかし表現レベルで
「草のゆかり」として規定され、さらには〈ゆかり〉の物語を想起さ
せる存在となっているのだ。本来〈ゆかり〉の資質を持たぬ〈形代〉
として登場したはずの督の君、彼女はいわば〈ゆかり〉ならざる〈ゆ

かり」なのである。

さてこの督の君の「ゆかり」性を補強する要素として、場面⑦で（ハ）の真砂君「寵愛」が加わったことも看過し得ない。真砂君が帝の心理への影響において督の君を補完していることは既に指摘したが、のみならずこの点においても、真砂君は督の君の担う機能を補完しているといえるのである。ここでもう一度、前節初めに引用した巻五の場面（②）を確認しよう。

恋しさも妬さも、月日に添へて忍びがたくのみおぼしまさるるままに、まさこ君を、夜昼御前も去らず召しまとはしつ、女御たちの御宿直の数、この君にみな押されたまひにたれど、様異のことにて、恨み申させたまふべきかたなきに、「なほ慰まぬ」といふやうに、ことわりなくのみおぼしめさるれば……（五・五一四）

このように帝が真砂君ばかり「召しまとはし」て、女御たちを夜召すことは稀になつていたにも関わらず、督の君が懷妊する理由はただ一つ、帝が他ならぬ「督の君の御方」登花殿で真砂君をたびたび「寵愛」していたという事実である。端的にいえば、帝は登花殿においても真砂君を「様異のことに」愛でていたといえ、督の君が帝に放っておかれていたわけではなかったことになる。かつて中宮に「夜の宿直は、人にすぐるとも見えぬものを」と評されていた督の君が、帝の寵愛を受け懷妊に至つたのは、帝が「少年」真砂君では満たされぬ情念を「草のゆかり」督の君へと向けたからではなかったか。真砂君を寢覚の上の代わりに愛でたとて、帝の情念は「なほ慰まぬ」ものであった。そのような折、帝は恐らく「にくからず、めづらしき」、容姿の類似も認識されず血縁もない「ゆかり」で

ある督の君へとその情念を注いだに違いない。この二人に対する帝の「寵愛」が共に「けはひ、手当たり」から始まっているというのも、実に暗示的といえよう。

もし真砂君が元服前の「少年」ではなく成人した「女」であつたならば、帝の子を儲けたのは真砂君であつたろう。しかしその可能性はもちろん皆無である。このように考えると、督の君は、真砂君が「女」であつた場合に迫つたに違いない運命をその身に引き受けた存在だつたのだ、ということに気付くであろう。真砂君が持つていない「女」という性を、督の君は分担していたのだ。督の君はまさに「女」という性によつて、真砂君の相対化された「ゆかり」あるいは「形代」としての機能を補完する存在だつたのである。彼女が「草のゆかり」として帝に規定される物語的意味はまさしくこの点に他ならない。

もちろん「草のゆかり」としての彼女は帝の心中にのみ起こる幻想であつた。このこと自体、そのような相対化された「ゆかり」／「形代」を求めずには居られない帝の閉塞状況をそのまま示すものである。またレベルを変えて見るならば、『夜の寢覚』はこのような方法を『源氏物語』から受け継ぎつつも、分裂させ相互補完させていることで独自の様相を見せているのだといえる。

四 結

未だ身体的な性差の外的徴証を帯びぬ、かつ元服前の「少年」であるというまさにその時間的一回性によつて、「女」に代わる「形代」

として帝に愛でられるべき存在たり得、かつ「様異の事にて」後宮の枠組みからも逸脱していた真砂君と、寢覚の上の身代わりとして入内し彼女との容姿の類似も血縁もないのに「草のゆかり」として帝に認識されへゆかり・性を担う督の君。《帝闖入》後、同一の空間内にあつてほぼ同時に帝寵を集めたこの二人は、共に「手あたり」すなわち触覚を契機として帝の心中にある寢覚の上の感觸の記憶が呼び起こされることで初めてそれと認識された、相対化されたへゆかり・《形代》なのである。このような相対化をもたらし帝という人物の認識のありようは、確かに後期物語の抱える眼差し＝感覺的認識の問題とパラレルなものであるといえるであろう。

彼らは相互に補完しあう、性差によって分離されたへゆかり・《形代》なのであった。二人の担う役割が揃っていたならば、寢覚の上の真のへゆかり・あるいは《形代》が登場していたはずだ。だが、寢覚の上に全てを収斂させるというこの物語固有の論理がそれを許さない。なぜなら、寢覚の上のへゆかり・あるいは《形代》が現れたならば物語展開はそのへゆかり・《形代》へと委ねられ主人公のシフトを招来するか、あるいはそこで充足しつつ終焉を迎えることになるからだ。この物語には寢覚の上の代わりになるものは存在しないし、必要ない。何しろ彼女は地上でただ一人天人の資質を受け継ぐ者なのだから。督の君と真砂君はあくまでへゆかり・《形代》《ではないもの》でなくてはならないのだ。二人がへゆかり・《形代》の物語を想起させ得る期間はあまりにも短い。繰り返すが真砂君は肉体の成長と共にへゆかりの資質を剥ぎ取られ《形代》としても機能しなくなる。「けはひ、様体」の似通いを「手あたり」によって

確認し得なくなった帝に残されるのは、帝の恋敵ともいうべき内大臣に生き写しの顔を持つ「真砂君」であろう。そしてその時督の君もまた、真砂君によって補完されていたへゆかり・性を失ってしまったに違いない。彼女はいずれまた「釣り船のたより」としての機能に回収されていく存在なのだ。

二人は確かにへゆかり・《形代》の物語を想起させる存在でありながら、そのどちらにも規定できないものである点にこそ意味があるのだといえる。『夜の寢覚』にはへゆかり・《形代》の物語の論理が「無い」ではなかった。むしろへゆかり・《形代》を確かに想起させるものでありながらそのどちらにも規定できないもの、へゆかり・《形代》《ではないもの》を語り、そうしてへゆかり・《形代》を排除しているのである。これこそが女君至上主義ともいうべき『夜の寢覚』の論理が要請した、反へゆかり・反《形代》の物語に他ならないのだ。どこまでも寢覚の上の主人公性は保証され、彼女へと物語は収斂する——ただ、彼女の主人公性を保証するこの反へゆかり・反《形代》の物語は同時に、帝のやむことのない執心と渴望とを決定づけ、帝の再接近という「危機」を予測させるものとしての長編的契機たり得ているというあやにくな構図をもたらししている、ということなのである。もつとも、それすらも彼女の「主人公性」を保証するものなのだということはやはり贅言を要すまい。

注

(1) 『夜の寢覚』本文の引用は小学館新編日本古典文学全集『夜の

寢覺（一九九六年九月）による。「…」は省略を示し、「」内は私注である。

(2) 鈴木一雄氏「物語文学を歩く」（一九八九年三月、有精堂）は、『源氏物語』の「ゆかり」の構成は「永遠の女性」思慕を前提とし「発見のプロット」を伴うものであり、光源氏の場合は両者への愛情が相乗作用で高まっていくのだと述べる。また宇治十帖を「ゆかり」の構成に支えられた物語だと見、浮舟の価値が「ゆかり」よりはつきりと低い「形代」なのであり、第一・二部の「ゆかり」とは質的に異なると指摘した上で、『狭衣物語』や『浜松中納言物語』はこの宇治十帖の「ゆかり」を受け継いだと論じる。『源氏物語』第一部と宇治十帖の物語の差異をこのような「ゆかり」・「形代」の方法的・質的差異に認める論には、例えば三田村雅子氏「源氏物語における形代の問題——召人を起点として——」（『平安朝文学研究』一九七〇年十二月初出、『源氏物語 感覚の論理』一九九六年三月・有精堂所収、大朝雄二氏「浮舟の登場——「人形」から「なでもの」へ——」（岩波「文学」一九八七年十月初出、『源氏物語続篇の研究』一九九一年十月・桜楓社所収）がある。一方高橋亨氏「源氏物語の「ゆかり」と「形代」——絵と人形と物語の文法」（『日本文学の特質』一九九一年七月・明治書院所収）は、「へもどき」による差異の生成は、「ゆかり」や「形代」がコピーの段階にとどまらず、オリジナルから自立し、ときにはその価値を逆転させることもある」とし、同様の見解も最近では多い。

また鈴木一雄氏前掲書は、「ゆかり」「形代」をそのように認

識する側の心内に起こる問題だとするが、この指摘は横井孝氏「「ゆかり」の物語としての源氏物語」（『源氏物語の探究 第十四輯』一九八九年九月、風間書房）や土方洋一氏「ゆかり」としての身体——光源氏の幻想のかたち——」（『源氏研究』二一九九七年四月、幹林書房）にも見られる。鈴木泰恵氏「狭衣物語と「形代」——身体感覚をめぐる——」（『武蔵野女子大学紀要』三〇、一九九五年三月）や、河添房江氏「ゆかり」の身体・異形の身体」（『源氏物語試論集』論集平安文学4、一九九七年九月・勉誠社）も視覚・触覚による認識を問題としているが、両者は『源氏物語』正編と宇治十帖との差異を、「紫のゆかり」・「形代」に対する視覚認識の絶対性／恣意性に見る。

(3) 中の君についてはもちろん「姉君はえ引き越したまはで」（一・二二）という父大臣の苦慮もあったわけだが、「このころ内には、関白したまふ左大臣の御女、春宮の御母にて后に居たまへる、御おぼえのいかめしさに、御はらからの式部卿の宮の御女、承香殿の女御ときこえて、私物に心苦しうおぼしとどめられたるすゑずゑにて、なにばかりのことあるべきにあらず。」（一・二二）と既に他の女性が入り込む余地のないことが父大臣を通して確認されている。

(4) 永井和子氏「寢覺物語の「中の君」——男性主人公から女性主人公へ——」（松尾聰教授古稀記念『源氏物語を中心とした論攷』笠間書院・一九七七年四月初出、『続寢覺物語の研究』所収）は、真砂君への帝の行為について「この少年を、少年自体

としてではなく、愛する女性の身代りの形でなでいつくしんだのである」。「むしろ、男性から女性への愛に近い感情であらう」とし、寢覚の上の「身代り」としての真砂君のありようを夙に指摘していた。近年では大倉比呂志氏「夜の寢覚論——女君造型と物語の方法——」（昭和女子大学 近代文化研究所「学苑」第六八五号、一九九七年三月）が、帝にとって真砂君は寢覚の上の「代用」なのだと述べている。また鈴木一雄氏は「帝とまさこ君との間柄は、『源氏物語』帚木、空蟬巻の光源氏と小君の関係を思わせるところがある」（小学館日本古典文学全集「夜の寢覚」一九七四年十月、三五一頁頭注）と述べ、大倉氏前掲論文はさらに一步踏み込んで「先蹤である」とする。

(5) 現存本に「昔より聞きおかせたまへることあるにより」（三・三〇七）とある。これにより、新全集頭注の指摘通り、帝が寢覚の上と内大臣との関係を昔から知っていたことが窺えるが、真砂君がこの二人の子であることまでをも知っていたか否かはやはり不明である。

(6) 寢覚の帝の人物造型が基本的に『源氏物語』柏木・夕霧・薫・匂宮の組み合わせとシフトによるものであり、それによって帝の作中機能の方向性が決定づけられているということについては、拙稿「をこがまし」の系譜——『夜の寢覚』の帝試論——」（『国語国文研究』一〇三、一九九六年五月）、『夜の寢覚』における「帝闖入」場面の方法——帝像の変容をめぐって——」（『国語国文研究』一〇四、一九九六年十一月）を参照されたい。

(7) 鈴木康恵氏論文（注2参照）は『狭衣物語』における触覚と記憶、相対化された認識・解体された「形代」の問題について論じたものである。『夜の寢覚』における「ゆかり」認識と相対化は氏の論じる『狭衣』のあり方に通じつつも、相対化された「ゆかり」・「形代」の、性差による分裂と相互補充が認められる点で異なっていると思われる。

(8) 末尾欠巻部において真砂君が帝の勘気を蒙り承香殿の女三の宮との仲を裂かれる事件が想定されている。この事件に関して鈴木一雄氏は「激怒の院の面影が重なっていたのかもしれない。」（『新全集』『夜の寢覚』五五〇頁）と述べているが、たしかにここには真砂君の成長に伴う「ゆかり」・「形代」性の損失と内大臣との相貌の類似が影を落としているように思われる。とすればこの意味でも非「形代」としての真砂君の物語は長編的契機を持ち得ているということができるとであろう。

〔付記〕 本稿は平成十年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（みやした まさえ・北大大学院博士課程
／日本学術振興会特別研究員）